

を通して考えさせられる現今の世相。魂を失った若者の犯罪が多くなり、人の命を玩具のように思う自由のはき違い。ちょっとした苦勞にも耐えられない意気地なさが見られる。若者よ元気を出して頑張れと言いたい。

必ず来ると思われる自然消滅、何とかして食い止めるのが、今の日本人に課せられた使命ではなからうか。

戦争は絶対に起こしてはならないと誰もが思うのは当然で、戦争ほど罪なものはない。自分から戦いを起こす愚かさを充分自覚せねばならぬ、妻や子供が命あやうしと見たら決然と闘う主人こそ真の勇者と思う。

不沈戦艦「大和」の最後

香川県 風呂敏行

私は、昭和三（一九二八）年一月五日、香川県さぬき市津田町津田で生まれました。海軍少年兵に志願して、昭和十八年七月一日、佐世保の「相の浦海兵团」へ入団しました。当時十五歳でした。そして十カ月間、特別教育を受けました。

海軍の軍隊生活は予想以上に厳しい毎日の連続でした。何と言っても朝早く起こされるのが一番つらかった。叩かれることは挨拶と一緒に叩かれました。海軍はバッタでやられました。「軍人精神注入棒」で皆さん一緒だと思います。苦しい毎日を生き抜いて、一人前の軍人になれると信じて懸命に頑張りました。

相の浦の特別教育が終わると、今度は横須賀の海軍航海学校へ入り、運用術操舵練習生となりま

した。教育期間は五カ月間でした。時期は昭和十九年四月より十九年八月まででした。八月卒業後、九月佐世保にて駆逐艦「初霜」乗組を命ぜられ、呉にて乗り込みました。

それまでは厳しい毎日の連続でしたが、艦隊勤務は戦闘中ばかりのせいとか、操舵の上官は優しくいろいろと教えてくれました。しかし、これからはミスは許されないと心を引き締めたものでした。

乗艦してすぐの十月初め頃出撃、どこへ行くのか分かりません。初めての当直舵を握って、艦長に大きな声で「操舵員かわりました。一水風呂」と報告しました。「よーし！　しっかり持って行け」と、艦長の声が返ってくる。私は胸を張ってようやく一人前の水兵になったような気がして嬉しかった。

艦橋は狭く、見張員三人位と操舵員一人、艦長、航海長七、八人しかおりませんので、上官の

一人言や話声は、いろいろ操舵員の耳に入ります。進路は南へ向いています。

呉を出て二、三日と思います。「対空戦闘配置に付け！」の号令で、操舵長が急いで上がって来て舵を私と交替しました。「お前！　舵取室へ行け」「ハイ」と答えて急いで配置に着きました。ここは、中甲板で上甲板は見えませんが。一人きりです。上では大砲と機銃の発射音で耳をつんざくばかりの音ですが、見えないから不安で仕方がありません。恐ろしくなって上へ走り上がって見ました。上へ行けばなお大きな音で恐ろしくなっています。また中甲板へ降りました。しばらく気を落ち着かせて、また上へ出ました。初めてじっと戦況を見ることができました。私の十六歳の初陣の姿でありました。これ一回きりで、あとは何回もの戦闘で恐ろしくない私が出来上がったのでした。

十月の終わり頃レイテ作戦に参加するため、レイテへ向かう途中ミンドロ島付近で対空戦闘に

よって兄弟艦の「若葉」を失いました。我が「初霜」にも爆弾命中しました。しかし大したことはありませんでした。それから再三再四空襲に遇いました。十二月シンガポールへ入港し、ここで昭和二十年のお正月を迎えました。

二月に入って、「北号作戦」で「伊勢」「日向」を護衛して、十日間を要して呉へ入港しました。この間何回も敵機の接触や敵潜水艦の攻撃を受けましたが、無事に作戦を終えました。

昭和二十年二月の半ば過ぎのことだと思いますが、海軍に入隊して初めての帰郷休暇があり、二、三日であったと記憶しています。嬉しくて胸をはずませて帰郷した思い出があります。

次は私がわずか一年足らずの乗組ではありませんが、既に戦後も六十年近くを経て今日も、強烈に脳裏を離れない沖縄海上特攻作戦参加のことで

す。
巨大不沈戦艦「大和」、軽巡「矢矧」以下八隻

からなる艦隊でした。四月六日、各自頭髪と爪を切って、封筒に入れて提出し、夕方出撃の壮途につきました。私の当直は日没近くで、故郷の山々が遠くにかすんで見えました。私は、練習兵時代の歴史の時間を思い出しました。教授の「故郷の山に向かいて言うことなし」という石川琢木の歌をもって私らを励まし勇気づけてくれた忘れることのできない思い出です。やはり、故郷の山はありがたいものであります。山々に向かって、次々に浮かんで来る思い出に別れを告げ、やがて来るであろう平和を祈りつつ舵を取りました。

明けくれば、四月七日、艦隊の姿を見渡すと、輪形陣で南へ向かって進んでいました。左前方二〇〇メートルに「大和」の勇姿が見えました。

「朝霧」が機関故障で落伍し、やがて姿が見えなくなりしました。しばらく時を経て「朝霜」が敵機と交戦中とのことでした。私達も必ずややって来る敵機を待って、早々と食事を終えました。

「対空戦闘！」の号令で、すでに配置に着いていた私は、周囲を見渡しました。私の配置はこの時、後部操舵で一人ぼっちですが周囲はよく見通せました。空一面の雲で視界は良くありません。雲の切れ目からグラマンが「大和」に殺到しています。艦隊は大きく散開して戦況はあまりよく分りません。

「大和」と「矢矧」も敵機の目標になっているようです。しばらくすると「大和」は艦橋が傾き、大分痛手を受けたようです。「矢矧」が航行不能になり、間もなく姿を消してしまいました。

敵機は少しも攻撃の手を休めないで、艦上スレスレまで、今までの戦闘では見たことがない高等の技術で攻撃して来ました。艦は唸りながら、のた打っているように走り廻っているようでした。各指揮官の号令が、響き渡っていました。一斉に砲撃音が耳を聳し、艦体が震うのです。長い長い戦闘でした。

「大和」を見ると、大きく傾き赤い腹を出し

て、その上に人が黒くなって見えました。「早く飛び込まなくては誘爆するぞ！」と私は心の中で叫んでいました。しばらくしてから目をやると、空中に上がった煙だけで「大和」の姿はありませんでした。

いつだったか、初めて「大和」に横付けして、油を貰った時、この艦は絶対に沈まないであろうと思いました。その不沈戦艦が沈没して、わが「初霜」は元氣です。真っ赤な炎を出して燃えている艦もあります。

敵機も去って、我に返って見ると、出撃した時の我々の勇姿は、もうそこにはありませんでした。艦隊が広く散開したのか、私には様子がはっきりと分かりません。私の艦「初霜」は沈没した艦の兵を救助して引き揚げるそうです。一体、この作戦で何隻の艦が沈んだのだろうか。兵は何千人死んだのだろうか。まだ他で泳いで助けを待っている兵がいるのではないだろうか。深い悲しみ

の心を残して帰途につきました。

帰った後で聞く所によると、小破した「雪風」、被害のなかった「冬月」、「初霜」の三隻で、沈没した艦の乗員を救助して無事、佐世保に帰ったのでした。この作戦で、「大和」「矢矧」「浜風」「磯風」「霞」「朝霜」が沈没し、「涼月」は大破、「雪風」は小破、「冬月」も戦死者が出ました。艦に被害も、戦死者の一人も出なかったのは「初霜」だけと聞きました。また参加艦のうち、佐世保に籍艦は軽巡「矢矧」と「涼月」「初霜」の三艦と
のことです。

後日に至って「初霜」の酒匂雅三艦長は、この作戦で「初霜」が無傷であったのは「私が若年の艦長で、占位位置が最後列であったため」と言われますが、最後まで「大和」の至近距離にいて「初霜」への攻撃も凄まじかったのに、一兵の戦死者も出さず、無傷であったのが、天佑であり武運と言えるのではと考えます。が、同時に艦長の

抜群の操艦を、私は一生忘れてはならないと思っております。

その後、「初霜」は宮津港に入港、敵機の来襲を受け銃撃戦となり、死傷者も出ました。近くの陸岸に接岸中、磁気機雷に触れて大爆発に見舞われ、砂浜一〇〇メートル近くに擱座ぐわさしました。今まで、どの作戦にも沈まずに生き残った名艦「初霜」も、七月三十日、終戦を後十六日にした日、遂に沈んでしまいました。この戦闘で八十人もの死傷者が出ました。

思えば尊敬、信頼できる上官と栄光の駆逐艦「初霜」に乗り組んで、幾多の戦闘に参加して、かすり傷一つせず無事その職責を全うして復員、ほんとうに幸運と言わなくてはなりません。

同年兵の半分は、戦死と聞きました。配置こそ違っても皆の生と死は、紙一重でした。日本の必勝を信じ、敢然として死地に赴き、戦争の良し悪しは別として、まだ若い少年が純粹な愛国心で、

たった一つの命をかけ、そして、散っていった同年兵や、この戦争で散華された多くの英霊の御冥福をお祈りしています。

それとともに、不思議に命永らえた私達は、地獄さながらな戦争の悲惨さを子孫に伝え、後世に二度と繰り返させてはならないと思います。私は平和の有難さをしみじみと感じ、これから残された人生で、何か少しでも世に奉仕する事を考えつつ、生きて行きたいと思えます。

最後になりましたが、私が十五歳で海軍へ入った時の私の家の家族は、父母を頭に長男が私、弟三人、妹三人の九人家族でした。

昭和二十一年一月二日 復員

昭和二十三年九月 結婚

子 二人、内孫 三人、外孫 二人

私 町役場に二年間勤務。いろいろ転職。

中華料理店経営、今は息子夫婦に譲る。

夢で「初霜」で最後まで共にした乗組員のこと

をしばしば夢見ます。

嗚呼 海軍少年電信兵

香川県 中尾 茂樹

私は、昭和四（一九二九）年三月二十七日、四国の香川県で生まれました。

昭和十八年八月九日、十四歳で佐世保の海兵団へ入隊しました。昭和十八年と言えば、太平洋戦争も戦勢利あらず、次第に国民生活も不自由となりました。男のみならず女までも総動員されて戦力の増強、補給の拡大に、銃後の底力を結集して、祖国の安泰に貢献せんと奮励したことが、子供心にも強く心に残っています。

海軍へゆけば家庭の中で、人べらしになる、または満州の義勇軍へ行くか？ とにかく男の子として早く国難に赴くべきとの気運濃厚の折で、たまたま海軍入りの話が小学校の先生よりありまし